言語資本

日本の述語的様式と言語資本の総合研究

国家資本の組み替え計画

新たな技術開発、経済・環境開発のための地盤 概要説明

日本高等学術会議 文化資本学会 / 分科会: 言語資本研究学会

日本語は非常に高度な論理的表現です。

- ・主語がない述語文。
- が軸になった表現。非常に論理的。 助詞(助辞)·助動詞(助動辞) のシステム
- 「で」。 界でも稀な論理構成になっている(「に」「を」(●格助辞は3つのカテゴリーへ集約され、世 世
- 動詞は人称で変化しない。人称はない。
- ・形容詞が変化する。
- 言表が同じでも動詞文と形容詞文とになる。

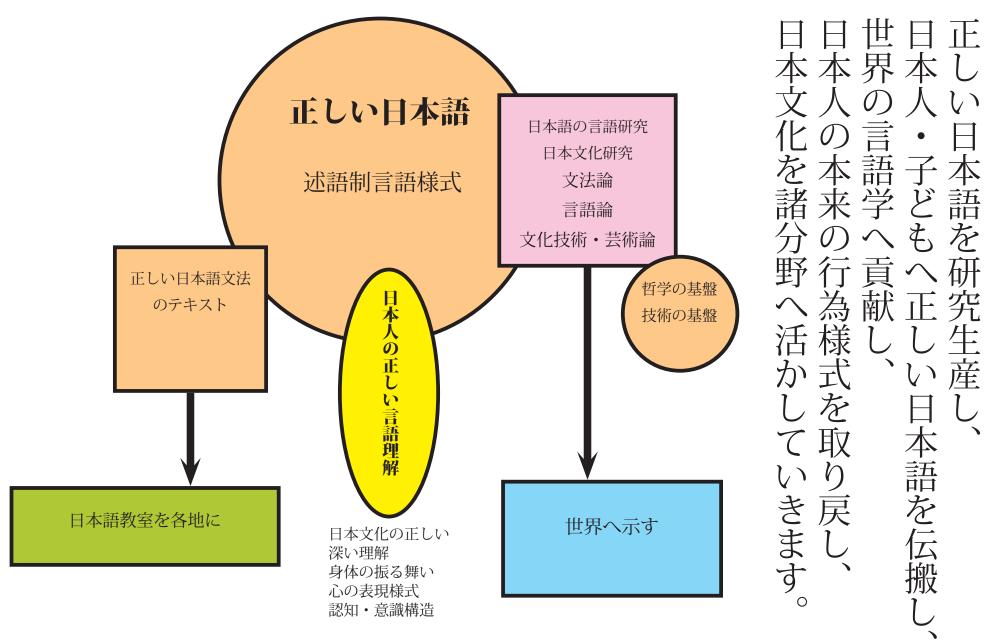
「財布が落ちています。」(形容詞)

「財布が落とされています。」(動詞)

本人の言語表現が失われているのですが、心性 などが「た」「です」ます」に単純化されて、 ●「き・けり・ぬ・つ・たり・り・けむ・あり」 は残滓しています。

英語やロシア語などの文法の適応をしているだけで、「日本語 他にも様々な特徴がありますが、学校文法や国語学者たちは、 れています。 自体」を文法化しえていない、間違った文法が学校でも教えら

会議は正しく明証にしていきます。日本語等日本語それ自体として、日本高等学術

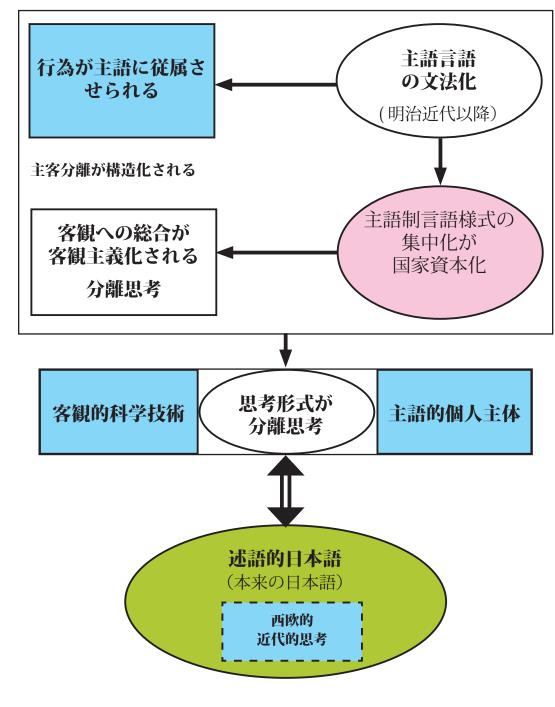


本語を伝搬

日本語に主語はありません。

に棹させば流される。 (『草枕』) ルを抜けると雪国であっ かう考へた。 意地を通せば窮屈だ。 智に働けば角が立つ。 兎角に人の世は (『雪国』) 情

総合」としていました。 資本とし 言語様式 を計るために、 へに主語はあ 」された科学技術の発展へ 0 諸個人の認識構造となっています りません ます があると の言語 そ \mathcal{O} そ



ぼくは、うなぎ だ。

ぼくは、うなぎ がたべたい。 ぼくは、うなぎ を注文する。 ぼくは、うなぎ を釣る。 ぼくは、うなぎ をたべたくない。

こんにゃくは、太らない。

have time.
have a son.
want this house.
want to see this.
understand French.
need time.
see Mt. Fuji.
hear a voice.
like Paris.
hate cigarettes.



have seen it.

時間 ある 息子 いる この家 ほしい これ 見たい 仏語 分かる が 時間 要る 見える 富士山 吉 聞こえる ŊIJ 好きだ 嫌いだ タバコ 見たこと ある

家<u>で</u>

太郎が ピザを、太郎が作っている。

家で、ピザを、太郎が作っている。ピザを、太郎が、家で、ピザを作っている。太郎が、家で、作っている。

述部

いかようにも入

れ替え可能にな

日本語は英語

の形式とは全く違うのです。

文は

で名詞と動詞が繋がります。

替えができませんが

日本語は盆栽型で

(意味合いが異

に動詞

(+目的語)

の述語が

つきますが、

 \Box

りませ

ります。

また、

簡潔な例

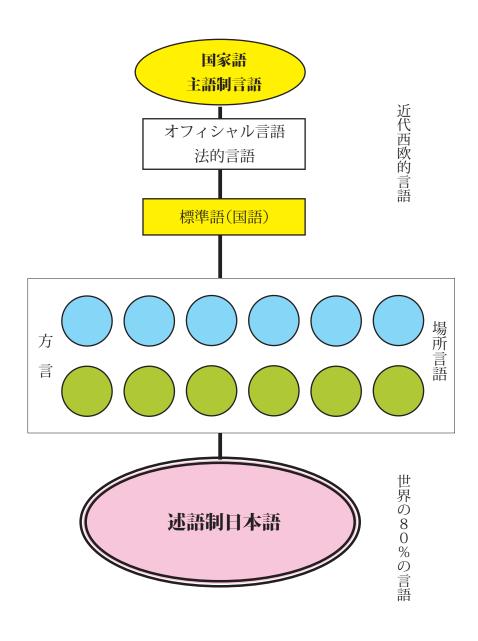
「うなぎ文」

で前後

未だに残る「場所言語(方言)」研究

述語制言語様式 です 異なる ナキュラー です。 です。 生態系、 心的な表出 超える 語が 場所言語は 捉え返すこ ませ ます。 です る 0 場

形成されますが 述語制言語様式は、 では、 主語制言語様式 世界の80%が述語言語であること 公用語、 ことができます。 述語制と日本語と 国家語と ル言語、 場所言語 こされて ての共通 標準語化され しまいまり 体系と共に



界を日本語に即して書き換える研究生産です。研究領域は、大きく四つの主要テーマでなされ

なされます。

日本語世

Ⅲ 述語表現の総合構成研究

- ①美術表現との比較考証
- ②伝統工芸技術との比較考証
- ③言語様式と統治技術との対応考証

I 文法史研究

- ①近世日本語論の研究
- ②近代文法論の研究
- ③欧米言語理論との対比考証: 近代西欧哲学批判

IV 新文法研究

①述辞の研究1:助辞

②述辞の研究2:助動辞

③形容詞変化と動詞変化との対比研究

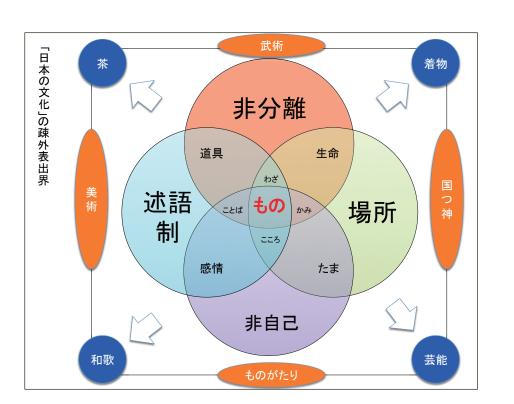
正しい日本語文法を作る。

Ⅱ 表出史研究

- ①古事記と日本書紀の比較対照検証
- ②歌形式の変遷研究
- ③物語表出史の研究: 物語言説と思想言説
- ④近代文学の表出研究
- ⑤文字:漢字とかな

日本文化の述語的な構成

言語理論 たま 言語が基盤となって構成されたものです。 (たま) に表象され います 、る基盤 らの世界 りませ です。 普



み替えら

た、

主語制様式

の国家資

本を、・ 国家資本の組み替え 能条件が開 主語制言語様式の 集中化·統一化· 統合化による 日本文化の本来の 近代の 述語制言語様式 か 述語制言語様式 国家資本 の国家資本化 (ことば、道具、アート) いきます。 1150年 国家 150年 思考方法の組み替え ・技術の組み替え 資本 の組み替え と組み替えることで、 ●人間と自然の分離 ●個人の主語化=主体化 ●人間と自然の非分離 ●客観の技術科学化 ●述語的意志の力 ●商品経済の画一性 ●述語技術科学化 「社会」の均一性 ●資本経済の多様性 「場所」の多様性 様々な可 \ominus \oplus 環境破壞 発展 効率化 他者・対象を見 なくなる 個人化

言語資本学会(文化資本学会の中のセクション)

研究デ クター

(言語哲学、 政治社会学

日本語研究、 ル

浅利誠 日本語論、

楠元恭治 (美術史)

科学技術)、 (場所研究)、

協力研究· 矢野雅文 美 小松弘 (着物研究)、窪山、松弘 (映画研究)、 窪山哲雄 坂井秀夫 (ホテル学)、 西野憲史 琴寄政人 (医療)、 (教育) 笹島寿

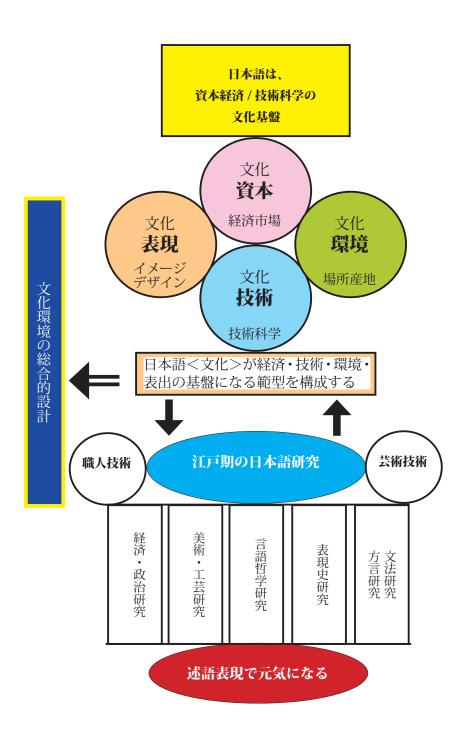
顧問 藤井貞和 (国文学)、 河北秀也 (デザ 山本理顕

招待研究者

近代文学、 言語史、 古事記研究、 漢字学、 など

様 々な分野の専 いきます 門研究者からの協力を仰い 言語資本から明らかに

また、 高等学術研究の基盤核となる言語資本学会です。 技術 経済 環境 • 政治 の資本形成寄与をなしていきます。



キャピタル・スポンサーへ

技術、 になっているものです。 言語資本研究は、経済企業に関係がないかのように見えますが、 日本の本質資本、 政治、 社会、さらにイメージ、 根源の資本です。文化、 意識、 芸術、 認知、 経済、科学、 感覚の土台

異なります。 言語資本が、 行動や意識・認知の仕方、 主語制であるか、 全ての物事の基盤であるのです。 そして技術開発の仕方が、 述語制であるかによって、 まったく 人の

明証にしていくことで、 クリエイテ 企業活動総体の基盤である言語資本を、 プロデューシング、パブリック・ イビティ、 さらにアドミニストレーション、 新たな可能条件が開かれます。 日本の普遍原理として IJ レーションなど、 マネジ

のですが、 遍原理の典型を日本は文化遺産・文化資本として持ち得ている 数か国でしかありません(英語、 成、つまり日本本来のあり方に立つことなしにはあり得ません。 や環境技術、そして政治・国家のこれからは、 日本のこれから、 しかも、 世界の8割は述語言語であるのです。主語制言語は、 未だ、 企業のこれから、さらに技術科学・情報技術 何ら明証にされていないことです。 独語、 仏語など)。世界の普 言語資本の再構

述語制言語様式の高等研究開発へのご支援を求める次第です。 学術研究全ての地盤・基盤となるのが、 言語資本研究です。

代わる、日本からの普遍原理の開示となります。 言説生産となっていきます。それは西欧原理の普遍化に哲学の超克としてなされ、日本そのものに即した新たなています。実際には、高度の概念・理論をもって、西欧**この概要説明署は、なるべくわかりやすく簡略化され

付】研究内容の概要説明

①近世日本語論の研究 ・ 文法史研究

式の原型体系として体系化 言説編制 ら十九世紀前半にお 富士谷成章、 れました。 体系を開 いた、 の空間が転移したときです。 それらはほ 宣長、 まさに日本固有のものでした。 いて、 柴田常昭、 ぼ同時期に産出されてい じます。 近世日本文法 鈴木朖、 それは、 春庭、 のある体系閾が構成さ ます。 述語言語 それを述語 十八世紀後 日本語 の表象

②近代文法論の研究

法が、 通路がつけられましたが、 大槻文法 その岐路にたつ文法体系です。 の導入によって、 近世と近代 日本語は主語制様式へ 双方を了解する と転じ 5 田

をつけます。 これらの差異をはっきりと識別し、 松下大三郎、 橋本・時枝の主語制を構築する系譜が対比的に出現します。 佐久間鼎、三上章の述語制日本語を継承する系譜 日本語の正しい文法の道筋

③欧米言語理論との 対比考証 :近代西欧哲学批判

拠したままであるためです。 日本語に関する言語理論が未熟です。 しているとは言い難 い実状です しかも欧米言語理論を正鵠に 0 それは、欧米言語学に依 捉

論・言語交換論・バナ ジュ論を踏まえて 必要があります の言語理論を再領有 ソシュール言語学 丰 **西欧哲学の限界閾を批判的** ュラー ヤコブソン/バン 言語史• - 言語論、 シニフ ヴェニスト/ に検証 デ

近世文法史

富士谷成章

賀茂真淵 貝原益軒

『あゆひ抄』 (1778年) 『かざし抄』 (1767年) (稿本あゆひ抄)

本居宣長 。詞玉緒』(1779年)

『活用言の冊子』

『玉あられ』 (1792年)

柴田常昭 『詞つかひ』(『詞の小車』)(1792 年)

鈴木朖 『活語断続譜』(1803 年頃なるが刊行は 1867 年)

『言語音声考』 『言語四種論』(1803年になり、

刊行は 1824年)

本居春庭

『詞八衢』(1806年)

『詞通路』(1828年)

さらに、

東條義門

権田直助

富樫廣蔭

そしてオランダー語の文法書から和語を解析した

鶴峯戊申ら

がいます。述語制が客観性へと離脱していく閾ですが、 この微差をしっ

か

りと表出転移として、 見いだしていかねばなりません。

山田孝雄 大槻文彦 日本文法論

日本文法学概論 日本文法講義

日本文法学要論

標準日本文法

松下大三郎

(改選標準日本文法

標準日本口語法

国語法研究 国語法要説

日本語の言語理論研究現代日本語法の研究現代日本語法の研究

近現代文法史

佐久間鼎

時枝誠記

橋本進吉

日本文法 一国語学原論

日本語の論理 現代語法新説 現代語法序説 九九五三年年年

金谷武洋

そして、

現在の

浅利誠

藤井貞和

本語論を基準にすることです。

II表出史研究

日本語言語表現の表出史を押さえ直 く必要があります。

設計 す の違 る原型 空間 であ る設計原理が います。 の構成、 設計 物語の構成が、 ります。 主語的表 元的な均

全 と和語 理を共存させ 創造的 的な訓み な行為 基本となりうるも 違 る · う 述語表出 です

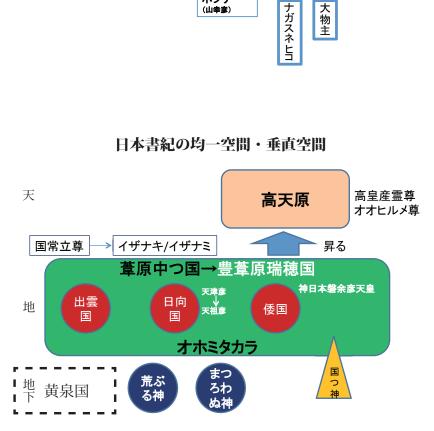
ます 自然と の述語関係 の心的

経済·技術· 政治 設計

天照大神

高木神

高天原 <国>



古事記の多元的な場所・水平空間

日向国

ニニギ ホヲリ

(山幸彦)

倭国

イワレビコ(神武)

海民 綿津見 大神

山人 大山津 見大神

根の 堅州国 スサノヲ

イザナミ

出雲国

大国主

典範型である

述語形式

歌集 述語形式2

和歌集 :述語形式3

的様式 は 自然表象と心的表出との非分離関係の、 の形式を示すものです。 それを、 の異なる述語 て明示的に体

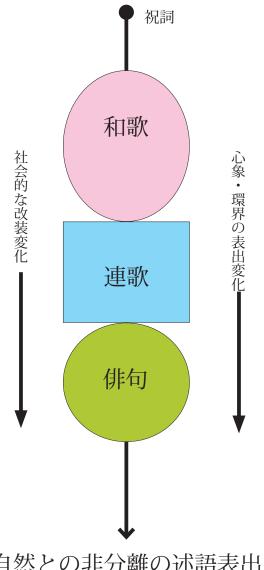
系立てます。

表現形式とし 賁 リズムが、

五七

俳句 五 (武士階級と商人階級の均衡)

言語形式 人がバラ ても踏襲されています。 階級間 の変遷と社会諸関係 均衡関係と対応し なった消費様式 とから、 現代和歌が、 言語 変遷とが、 て構成され、 の現れでもあります。 の規制世界 破格になるのは、 いかに関係 それが、 の構造を明ら 現在にお 7 諸個 る



自然との非分離の述語表出

物語言説と思想言説

0 日 本 の多様な古典物語から、 述語 制 世

ます

ŧ せん。 きます 日本文化 膨 の表出 で豊かな 0) 研究から、 全てがあると言 述語制文化を明証 っても過言

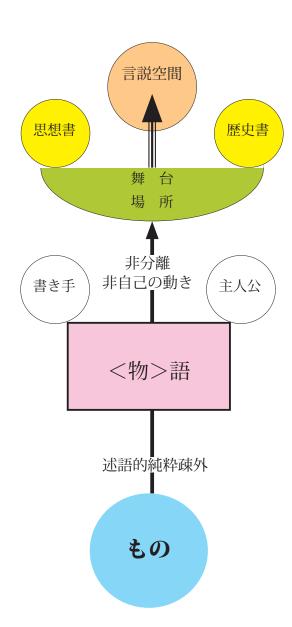
もののけ〉「も のあはれ」のへも Oと「色好み」 色

成す 「対資本」 の多様な表出です。

能条件 非 語 き さ よる光源氏たちの る 非自己世界が 日 物語 記や随筆 ですが は 客観描写ではあ おける主 自己」 伊勢物語 書き手と主人 ます いかに異なる とはま 八公とのず つたく 百記、 りません と 述語主 異なる次元 述語 体 お 表出 る

きます)ますが、 に述語言語様式 問題は 述語的 本居宣長 田 成

遷 変遷構成と て重 日本語言語理論 要な問題 助辞 です。 在を出 の変遷と 現させ 国学 言 説 の照応は、 るでし の次元よ よう。 述語



④近代文学の表出研究

す。その翻訳文 化を見直り します =主体の存在が、 探求されていきま

文表記へと全体的に移行していきます。が、「書き言葉」と「話し言葉」との差 言文一致の形式は、 近代の誤認が真理生産されていく典型です し言葉」との差異が、 漢文表記から和

法的言語、オの大転換を、 れていったかを明証にして、述語様式の残存を再確認していく文学者たちの格闘から、言語表出形式が、いかに変容し形成さ学問体系の基盤を変えて、近代化の言説を生産していきます。 社会科学的言語、人文科学的言語は、近代文・現代文となって大きく変えていきます。着物から洋服への転化が並走します。標準語化される言語資本は、日本人の思考構造・技術構造をも 近代的な主語制様式の国家的な集中化・ ことが要されます。 オフィシャル言語の変化をも生み出していきます。 文法・学校教育・文学の世界において出現させ、 統一化は、 言語資本上

⑤文字:漢字とかな

指標にして、現状生徂徠、かな出史総体におい 述語表現における漢字と仮 人に いかなる感覚 思考生成 かな文字言説 かな文字言説の て検証され 日本語文の様態を明ら • 認知 0) 関 名との相反共存的な相互関係が 極限が本居宣長ですが、その二つを ねばなりません。 ・意識をもたらしたのか わります。 かにすることです。 漢字言説の極限が これら表 \exists

Ⅲ 述語表現の総合構成研究

①美術表現との比較考証

雪舟・雪村の水墨画

大和絵

から、

狩野派

等伯、光悦、宗達、

浮世絵:師宣、清信、春信、春草、

歌麿

光琳──→酒井抱一

蕭白 蘆雪

応挙

司馬江漢 広重 北斎若冲

国 芳

暁斎 月岡芳年

いった「和」美術の系譜は、述語岡倉天心 横山大観 などなど

日本語 表現 とです。 の結晶ですが の世界的傑作 の述語形式無く 美技術が 固 の美表出であり、 の美術理論がまった 離 の述語表出 美の 和形式 西欧 であ くありません。 の表出はあり得な 画にはな り、 そ の多彩な表現 い非分離技術 い
こ

が

美術系譜に具体化され

、ます。

影もな され 木 、ます。 や水や 体系的考証が ます 日本 写は 新たに必要です。 空間 感 感覚 写ではな ころ 絵画表現 認知の本質地盤です。 非分離 水に映る影も日 配置 ともよく にな つ そ示 7



伝統工芸技術との比較考証

駒凧

組籠水木

庇

縁側

焼きも 陶

衣食住に関わる全

和紙 花押

判子

かるた 寸

砚、

墨

包草和筆み履傘 包

銘 絲 紐

々膳

鮨

汁

な表出 〈もの〉 述語技術 です。 は、 言語形式と無縁ではなく、 て作られています。 言語表現の技術的

役立ちますが、日本の高度な際 道具は に把捉され 言語様式な です、 を踏まえ 心的な関係 た端技術 機能が十 ぼす。

生産性の増強と均衡 客観的技術 述語的技術 パワー道具手段 ハンド道具 power tools hand tools 他律エネルギー 自律エネルギー convivial なツール

相反共存

convivial とは、 共に生き生きと。

京都 公家 統 治制 制 します。 で東国 . . 武 士制

 \mathcal{O}

統 、きな基 あ ます

現 す Ź 0) ですが 神 \mathcal{O} 体系

です 無意識に 相反性を共存させる力作 現れています。 開が

文化の二大基盤 日本を規制している歴史的文化地盤 猿田彦 国つ神 天つ神 クニブリ (都城) (那須御用地) 将門 島津藩 栃木 (日田:天領) 東 京都 明治近代 武士制 公家•天皇 後北条 全国統治における地方か らのあこがれ 場所をそれぞれ 化 活かす設計 国 小 場所 江戸 廃藩置県 ·田原 国民市場経済 藩体制 戦国武士制 相反共存性の設計 場所市場経済 社会を消して、パブリックにする

IV

述辞の 研究 1

をが

で

へに

لح

った助詞ならざる 助辞」 が、 語句を連結 します。

そこには、 日本語固 有の論 理構造があ ります。

そ 係り は いう特有 の助辞があります。

は、 山本です。

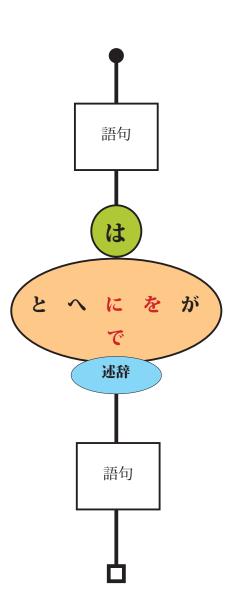
わた

は未だに なされ ど誰も説明できません。を日本人は「きぇん~」 人は、 法的な説明はそれなりになされていますが、 明証にされていないのは、 きちんと区 いためです。 別して表現できますが、 国語学でも、未だに定まっていません。 「述語制様式」の理論化が それをほとん その論理

本学会 して本質的な任務になります。 体系として理論化することが、 言語資

合的に踏まえて、 ・宣長から藤井貞和 体系化せねばなりません。 (文法詩学)までの述辞論の遺産を総

(繋辞) はない のです、述辞があるだけです。



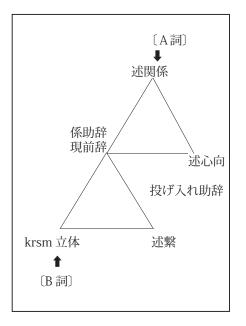
研究2

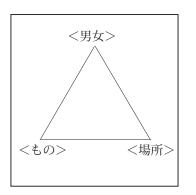
を関係ざ 述語 現 助動詞ならざる です。 「助動辞」 が文を決定

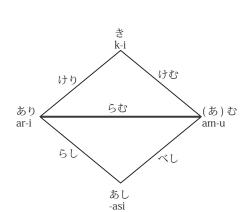
述語表 て krsm 体系と 非常に難 を表出 \sim 自体で意 存在 の述語表出 r、 対象ですが るゆえ意味 して指標が提示されました。 形容の述語表出 用が可能になります。 0) 研究者である藤井貞 ではなく 助動辞 ώ, 推量 が

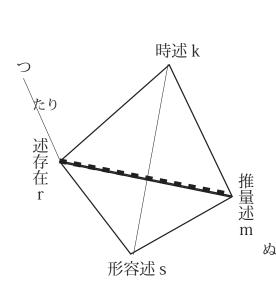
語表出 を踏まえて、 mです。 述語言語理論を構築し の構造です。 します。

しに現代語の解明はあり得ません。 krsm 助動辞の述語的関係









②形容詞変化と動詞変化との対比研究

西欧語は、 と主語制様式とし 日本語 動詞 理論が出現し て大きく変化 人称で変化はしません、 したことで、 していきます。 表象表現が人称表現 述辞関係

また、 します。 形容詞は西欧語では変化しませんが、 日本語は変化

す、 八称ではなく、 動詞変化、 対象のあり方として変化するのです。 形容詞変化は、述語制の語変化であって、

決定的な西欧語とは異なる言語理論を要します。

関係にあるゆえです。 行為における動きと自然様態の動きとが、

非分離の述語制

もの の非分離から表出されています。

